

ソフトウェア品質技術者資格 派遣責任者インタビュー 株式会社インテック様

「品質技術者をプロフェッショナルに！ その一歩としてソフトウェア品質技術者資格制度を活用しています」

1964年、富山県に「富山計算センター」として誕生した株式会社インテックは、設立以来、“いつでも、どこでも、誰でもコンピュータを利用できる「コンピュータ・ユーティリティ社会」”の実現を目指して、富山県の県民性そのままに実直な経営と研究開発に取り組まれてきました。現在では、日本を代表するシステムインテグレーターです。

そのインテック様から、このところ実に多くの方に「ソフトウェア品質技術者資格」試験(以下 JCSQE)を受験いただいています。

そこで今回、インテック様をご訪問し、JCSQE で目指しているところや期待をお伺いしてきましたので、紹介いたします。

(聞き手: 日本科学技術連盟 矢口里美)

株式会社インテック 生産本部 品質保証部長 池田 浩明 様 同 品質保証部 小林 麻美 様

「創立 50 周年を迎えて打ち出された目標 “社会システム企業”を目指すために」

聞き手:
インテックさんは、以前から、私どもで提供しているソフトウェア品質向上のためのセミナーや研究会、またシンポジウムなどにご派遣いただいていたのですが、最近では特に研究会や資格試験に多くご参加いただいています。
品質教育にとっても熱心に取り組まれていますね。



《東京・江東区にある東京本社》

池田さん:
はい、弊社では過去 TQC(全社的品質管理)を導入していたこともあり、日科技連さんでソフトウェア品質に関する教育が始まった 1980 年の黎明期から、品質教育には熱心でした。
丁度その頃、私は TQC を推進する部署におり、まさに品質管理のど真ん中で携わっていました。

聞き手：
まさに、TQC の全盛時代ですね。

池田さん：
はい、1990 年代までは全社をあげて品質教育に取り組んでいました。しかしながら、その後、バブルがはじけて品質教育も一時停滞していました。

聞き手：
でも、ここにきてまた復活の感がありますが。

池田さん：
2014 年に弊社では創立満 50 年を迎え、「社会システム企業」を目指すという目標を掲げました。いち Sier に留まらず、企業、産業そして社会における新しい価値を創造する企業でありたい。そのためにも、より高い品質を目指していこうと。これを契機に、品質管理プロセスの再構築に取り組んでいます。



《インタビューにお応えいただいた池田さん（左）と小林さん》

「品質レベルの見える化に向けて」

聞き手：
品質教育復活の経緯はわかりましたが、それがなぜ、JCSQE 試験受験者の急増につながったのでしょうか？

池田さん：
社会システム企業に対する重責から見ても、品質もトップレベルを目指す必要があります。目標に向けて品質レベルを見える化するには、資格の取得者数も一つの指標になるのではないかと思います、社員にも受験を呼びかけています。

「実務で身につけた知識を整理でき、スキルアップに役立ちました」

聞き手：
池田さんからは、派遣者として JCSQE の活用についてお話をお伺いしましたが、小林さんは、実際に JCSQE の有資格者ですね。実際に受験されてみてどうでしたか？

小林さん：
品質技術を体系的に学習ができました。仕事の中で覚えてきた知識が、資格試験の受験勉強をすることで整理できて良かったと思います。

また、今回は中級資格も受験したのですが、実践的な現場での応用知識が問われているので、自身の職場に置き換えて学習でき、実業務でも参考になりました。

「品質技術者をプロフェッショナルに！」

聞き手:

ところで、今回も大変多くの方に貴社から受験いただいておりますが、本資格はかなり社内において浸透しているのでしょうか？

池田さん:

浸透しているかと問われると、まだまだですね。

品質技術者はもっと専門的でプロフェッショナルな職種であるべきと思っています。品質技術者の地位を向上し、発言力や指導力を高めていく、そうすることで品質のレベルをもう一段階あげていきたいと思っています。

聞き手:

品質技術者がプロ意識を持つ、その一つの方法として資格試験を活用されているのですね。

池田さん:

はい、今後の品質保証はますます難しくなると思います。品質技術者がプロフェッショナルとして高い能力と責任感をもって品質に取り組めば、他社との差別化にもなり、会社としても競争力が高まるのではないかと信じています。

聞き手:

本日は、お忙しいところ、ありがとうございました。